

成願寺

季報

108

平成 28年 2月 18日
(2016年)

目次

「大般若の功德」 浅井完自……………	1
「東京三十三所観世音霊場」のこと 小林貢人……………	4
成道会「泊坐禅会感想文紹介」……………	8
「新・日本の歴史」シリーズについて 大角修……………	10
山内短信……………	12

発行 多宝山成願寺
〒164-0012 東京都
中野区本町 2-26-6
電話 03-3372-2711
制作 地人館

平成二十八年大般若祈禱会説教

大般若の功德

静岡県龍豊院住職 浅井完自

皆様、明けましておめでとうございます。静岡県から参りました龍豊院と申します。成願寺様の若方丈とは修行時代の同期生でして、昭和六十二年三月に横浜鶴見の大本山總持寺に上がりまして、厳しい修行を共にいたしました。出会いから三十年近くが



静岡県龍豊院住職
浅井完自師

過ぎましたが、現在もこうして年に二回、夏の盂蘭盆会と冬の大般若祈禱会にお手伝いにながらせていただいております。本日は新たな年が素晴らしい一年であるように祈念する大般若祈禱会ということで、最初にこの法要の成り立ちや意味合いなどを資料を元に少し説明いたします。大般若祈禱会は「大般若経」をお読みすることで、その功德をもって世界平和、参列の皆様やお盆、または年忌法要などをご先祖様の供養として営むわけですから、お祈りする内容が違わうわけです。日本においては千三百年も前にこの法要が修行されたと記録が残っています。申しました「大般若経」、正式には「大般若波羅蜜多経」と申し上げます。仏教には数多経典がございますが、その中でも最大規模でございます。文字数にしますと五百万文字。経典といたしますと六百巻という大変長大なお経となっております。

皆様よくご存知かと思いますが、「西遊記」という物語がございます。三蔵法師や孫悟空が出てくる、日本でもドラマ化された有名なお話です。この三蔵法師、玄奘三蔵げんじょうさんぞうという方で、実在の人物です。千五百年ほど前に中国からインドへ渡り、持ち帰った経典の中にこの「大般若経」がございました。インドの古い言葉で書かれた経典でしたので、玄奘三蔵はそれを漢字に翻訳されました。内容としては、全部で十六の場所でお釈迦様が説法された、その記録でございます。玄奘三蔵は漢字への翻訳を終えるとはどなくお亡くなりになったそうですが、その際に「自分が生存中にこの翻訳事業が完了したというのは諸仏龍天の助けがあったおかげである」というような言葉を遺したそうです。そうしたことから、この経典が、国家や民衆を護つてくれる力があると信じられて、後に大般若祈禱会が修行されるようになったということでございます。

皆様の前、この本堂に経机が並べられて経典が安置してございますが、一包みに十冊入っております。六百巻ですから、六十包みあるということです。先ほど、「大般若経」をお読みすることで功德をいただくと思いましたが、五百万文字をとっても法要中に読

めるものではございません。数日かかってしまいうので、別の方法、転がし読むと書きまして「転読」という作法で行ないます。経典は蛇腹の造り、折れ本と申しますが、これをばらばらと左右に振る読み方をいたします。こうすることで一文字一文字を読み上げなくても、読んだことと同じ功德をいただけます。法要の中でご覧いただけますが、「転読」いたしますと、経典から風が起こります。その風に「大般若経」の功德が乗って溢れ出てきます。風に乗り本堂内に功德が行き渡るということでございます。

法要が始まりますと、始めにご本尊様にお経を上げます。お釈迦様ですね。と同時にこの「大般若経」を守護する神様や菩薩様がいらっしやいます。十六善神と申し上げまして、成願寺様ではお釈迦様の背後に木彫りのレリーフ(高さ二メートル、幅二・六メートル)がお祀りされています。このお釈迦様と十六善神が本日の祈禱会の本尊様となります。

時が至りますと殿鐘てんしょうと申しまして、法要がはじまる合図の鐘が鳴ります。その鐘の音を聞いた僧侶たちが本堂に集まって参ります。次に大きな太鼓、大播だいらいと申しますが、迫力いっぱい打ち鳴らされます。この大播の音に合わせまして、この式を司る導

師であられる方丈様が上殿なさいます。

方丈様はまず本尊様に三拝をなさいますので、皆様も合掌をもって三度お拝をお願いしたいと思います。その後、本堂を浄める、邪気を払う儀式であります。浄道場が係の僧侶によって行なわれます。その際に一人目の僧侶は香り高いお香をたき、二人目の僧侶は洒水と申しまして、浄水を散きます。本来ですと三人目の僧侶が散華と申しまして、花びらを模した美しい紙を撒きますが、持ち帰りご仏壇にお供えいただきたいものですから、法要の後にお授けするお札に入れてございます。

次にお経に入ります。「般若心経」を三度繰り返してお読みします。「般若心経」は「大般若経」の特に大切な部分を二百六十字に集約したお経です。これが終わると同時に先ほど申しました「転読」が始まります。一人の僧侶が三十巻ずつ、大きな声で「降伏一切大魔最勝成就」と唱えながら「転読」いたします。その後、「観音経」が始まります。この時に皆様には進み出たいてお焼香をお願いします。その際に方丈様が「大般若経」の中でも一番大切な「理趣分」という経巻をお持ちになり、皆様のより近くで功德の風を受けていただけるようにしてください。

います。お焼香とお経が終わりますと、最後に本尊様に再度三拝をなさいますので、最初と同じように皆様も合掌にて礼拝をお願いできればと思います。

ここで、皆様より「なぜお焼香をするのか」という質問をよくいただきますのでご説明します。これは、お釈迦様が現世におられた時の話でございます。ある長者の二人の息子がお堂を建て、お釈迦様をお迎えしたいと願い、お香を焚いて祈願をしたそうです。そうしましたら、お香の煙がお釈迦様のいらつしやつた祇園精舎へたなびいて頭上を覆った。お釈迦様は二人の信仰の深さに気づき、二人のところへ参られたそうです。お香は皆様の信心や祈願を運び、お釈迦様に伝えてくれる使者というわけです。

いろいろお話し申しましたが、この法要の最大の功德は、皆様の祈願が叶うということも大切なわけですが、本尊様、十六善神、そして「大般若経」の力によってご自身が護られているということを信じ、それが安心に繋がっていくということ、これが最も重要な功德ではないか、と思うわけです。どうか今年一年皆様が心安らかにお過ごしただければ幸いです。それを念じてこれからお勤めをはじめさせていただきます。

合掌

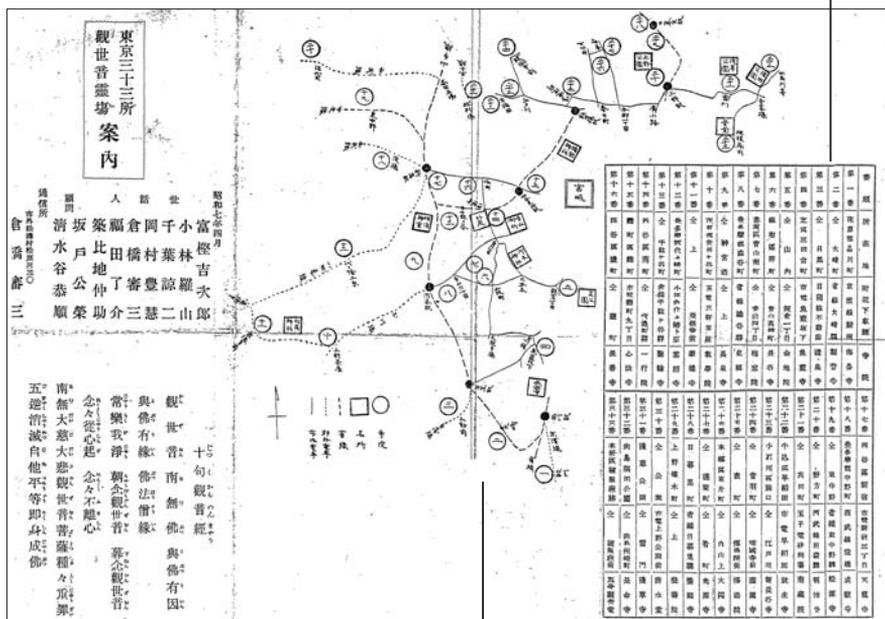
「東京三十三所観世音霊場」のこと

成願寺住職 小林貢人

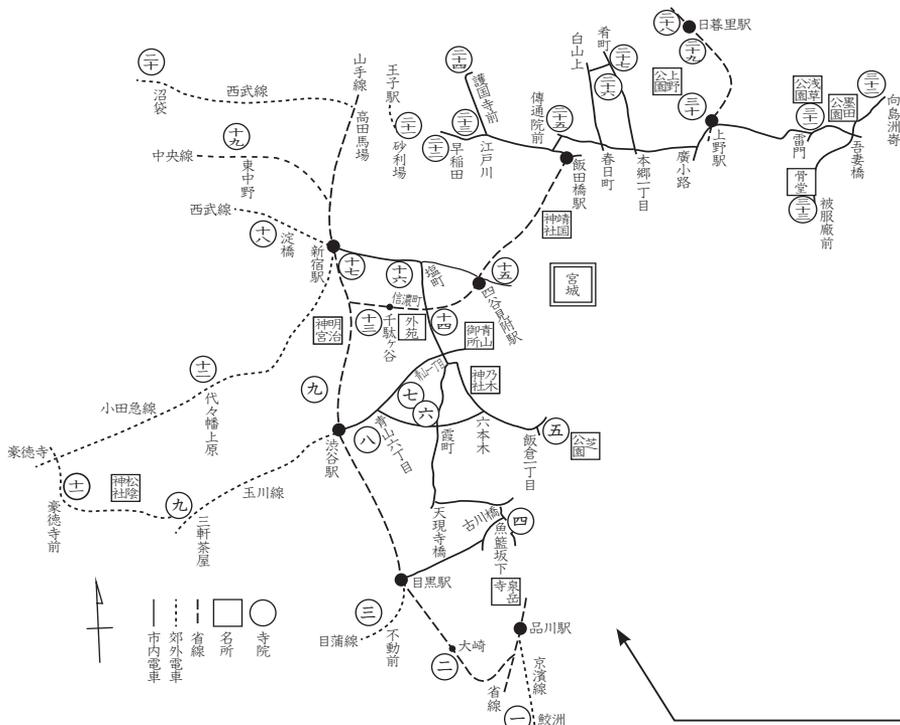
古くは平安の世から神社仏閣をおもに各地域ごと札所という集まりを造り、巡拝を勧めた。これが伝統を学び名勝を楽しむ日本旅文化の濫觴と聞きおります。成願寺山門前に「百體観世音安置東京第十八番霊場昭和十二年十月建立」と刻まれた石塔が建つ



番順	所在地	付近下車駅	寺院
第一番	荏原郡品川町	京浜線鮫洲	海晏寺
第二番	荏原郡大崎町	省線大崎駅	観音寺
第三番	荏原郡目黒町	目蒲線不動前	滝泉寺
第四番	芝区三田台町	市電魚藍坂下	魚藍寺
第五番	芝区山内	市電飯倉一丁目	金地院
第六番	麻布区筈町	市電青山高樹町	長谷寺
第七番	赤坂区青山南町	市電青山四丁目	梅窓院
第八番	豊多摩郡渋谷町	省線渋谷駅	東福寺



第九番	豊多摩郡神宮通	省線渋谷駅	長泉寺
第十番	荏原郡世田ヶ谷町	玉電三軒茶屋	教学院
第十一番	荏原郡世田ヶ谷町	玉電豪徳寺前	豪徳寺
第十二番	豊多摩郡代々幡町	小田急代々幡上原	雲照寺
第十三番	豊多摩郡千駄ヶ谷町	省線千駄ヶ谷駅	聖輪寺
第十四番	四谷区南町	省線信濃町駅	一行院
第十五番	麹町区麹町	市電麹町九丁目	心法寺
第十六番	四谷区塩町	市電鹽町	長善寺
第十七番	四谷区新宿	市電新宿三丁目	天龍寺
第十八番	豊多摩郡中野町	西部線淀橋	成願寺
第十九番	豊多摩郡東中野	省線東中野駅	松源寺
第二十番	豊多摩郡野方町	西武線沼袋駅	明治寺
第二十一番	豊多摩郡高田町	玉子電砂利場	南蔵院
第二十二番	牛込区早稲田	市電早稲田	放生寺
第二十三番	小石川区関口	市電江戸川	新長谷寺
第二十四番	小石川区音羽町	市電護国寺前	護国寺
第二十五番	小石川区表町	市電伝通院前	傳通院
第二十六番	本郷区東片町	市電白山上	大圓寺
第二十七番	本郷区蓬萊町	市電肴町	光源寺
第二十八番	日暮里町	省線日暮里駅	養福寺
第二十九番	上野櫻木町	省線日暮里駅	養寿院
第三十番	上野公園	市電上野公園前	清水堂
第三十一番	浅草公園	市電雷門	浅草寺
第三十二番	向島隅田公園	市電向島州崎町	長命寺
第三十三番	本所区被服廠跡	市電被服廠前	万骨観音堂



ており、私は昭和初期に札所めぐりが発願され、戦争被害で有無消散した会があったと見ていました。

二年ほど前、立ち寄られた大和市在住宮城政栄氏から、関東大震災犠牲約五万五千人のご遺骨を、別表三十二ヶ寺が分担して預かり、のち「震災記念堂」(現東京都慰霊堂)に合祀されたいと伺いました。そこで東京都慰霊堂広報と塚田芳雄氏「江戸東京札所事典」により該当三十一寺院に「関東大震災とその後」の貴寺院の対応について文書石碑など記録ございませんか。七十年前アメリカ空軍爆撃に遭い当寺には記録が一切残っておりません。」と手紙を差し上げました。

寺院方から頂いた御返事は「本寺も空襲で全山灰盡、だいたい東京三十三札所とは聞いたこともない。」が大部分。空襲を免れたお寺さんも「お骨預かりは記録なく、地理上も敷地上も考えられない。」とのご連絡。「いろいろ調べたが情報ゼロ」浅草寺様、長谷寺様。「札所巡りの本(前記)だけに出ている」光源寺様。「東京三十三観音札所の一員だったそうだ」品川観音寺様。「大東京百観音と東京第十番二つの印鑑がある。後は何も無い」世田谷教学院様。

そうこうするうち、目黒不動瀧泉寺滝口順浩様よりお電話あり、先々代住持が「大震災後、来る日も来る日も慰霊のお経を読んだものだ。」と話してたの由。また百観音明治寺草野榮雅様より「二十年前御朱印のお客様が見せてくれた地図をコピー、いま探し出した」(四頁参照)と送って下さいました。

五年前の大地震犠牲者供養も多くの僧侶が参加しました。大正十二年の犠牲者供養も同様だったでしょう。被災地寺院は自坊と近隣被害で余裕なく、五万五千体の犠牲者とは引き取り不明の方々、供養に郊外の寺院が火葬場に向いたのではないか、なお境内広い寺はお骨預かりもあつたでしょう。

震災記念堂が落成して間もなく、発案の世話人がこの縁深い寺院に声かけ昭和七年発足したのが東京三十三所だったと私は考えます。成願寺の石塔に昭和十一年と誌されたのは、時の内務大臣後藤新平発案の環状六号道路新設で境内が分断され山門移転したせいでしょう。石塔に刻まれた字は力強い楷書で、書道の上手な役僧が書いたと聞いております。

文豪菊池寛が「近代日本もこれで潰えたか」と涙した話もある関東大震災も復興の目安が着き、大不景気の襲来につづく軍人政治への歩み、そして第二

次世界大戦に振り廻され、東京三十三所が忘れられたのでしよう。

報告まで。

なお、東日本大震災から五年です。同じ道を辿らないよう祈つてます。

追記

四頁下段に掲載した「東京三十三所観世音霊場案内」に、この三十三観音を設立するに当たり、世話人七人、顧問二人の名前が連署されています。

いずれの方も仏教および観音菩薩に縁のある方々と思われませんが、昭和七年のことですので、どのよ

昭和七年四月

富樫吉次郎

小林 羅山

世 千葉 諒二

話 岡村 豊慧

人 倉橋 審三

福田 了介

築比地 仲助

坂戸 公栄

清水谷 恭順

倉橋 審三

顧問
市外 榑村 松原 三〇
通信所

うな方々であったのか調べるのは困難です。そのうち、経歴の

分かった方を以下に紹介させて頂きます。

顧問の一人、清水谷恭順

(一八九一〜一九七九)は、天

台宗の僧、仏教学者であり、浅

草寺の二十四世貫首を勤められ

た方です。群馬県出身。大正四

年(一九一五)に天台宗大学卒。

昭和元年(一九二六)、大正大学

の創設により教授に就任。昭和三十五年(一九六〇)、「台密の成立に関する研究」で大正大学文学博士。昭和初期に「観音経講話」のラジオ放送を行なうなど、仏教の大衆化に貢献しました。法華経・観音に関する著書は数十冊に上ります。第二十七世貫首・清水谷孝尚(二〇〇二年遷化)の養父です。

もう一人の顧問、坂戸公栄の経歴は不明ですが、明治四十年(一九〇七)に横浜新仏教救世会から『妙力門六大義』を出版。大正十三年(一九二四)に日本禅書刊行会から『心の救ひ観音の宗教』を出版しています。

世話人の一人、築比地仲助(一八八六〜一九八二)は、群馬県太田市の生まれ。徳川初期絵入板本を多く所蔵しており、東洋大学国文学会からその『目録』が出版されています。また、明治期の左翼運動家としても知られており、『革命歌』や『南葛労働者の歌』などの作詞をしています。

了

成道会一泊坐禅会感想文紹介

昨年十二月五日（土）に修行された一泊坐禅会参禅者より感想文が届きました。以下に紹介します。

小学一年 國見 裕子

わたしは、一ぱくざぜんに、はじめていきました。まず、はじめに、ざぜんをしました。ざぜんをやるまえは、ドキドキして、ざぜんのさい中は、きんちようして、ほかのことをかんがえてしまったりしましたが、おわたたときは、ぶじにざぜんができたなあ、とおもい、ほつとしました。もつとらしくにざぜんができるようになりました。

そのあと、先生のおはなしがありました。おはなしは、いっぱいありましたが、一ばんこころにのこったのは、でん車の中で、けいたいでんわばかりをいじっていることはよくない、というおはなしです。「こころ、いき、からだ」は、つながっていて、その三つがとどのわないと、じぶんぜんたいが、きちんとたれないということです。

よる、おいなりさんをたべました。わたしは、おいなりさんががてでしたが、一ぱくざぜんでたべたらおいしかったです。それから、たのしかったこ

とは、おぼうさんにあんないしてもらって、せんとうにいったことです。せんとうにはじめていったので、こんなところなんだなあとおもいました。かえりみち、もう一ぱくしたいなあ、とおもいました。つぎのあさは、はやおきできました。ざぜんをしたあと、ふとんをはこんだのがたのしかったです。おかゆもがてでしたが、たべることができました。一ぱくざぜんにいつてよかったです。 合掌

奥村 えつこ

「只管打坐」ただ坐るといふ行為がこれほど難しいものだとは思いませんでした。坐禅するにあたっての作法やその意味、坐禅そのものが目的であり坐ること自体に集中することなど大変奥が深いものだと知りました。一泊坐禅会に参加する前までは、坐禅ぐらい誰にでもできるものだと思っていました。しかしいざ始まると普段坐禅などしないせいとか、股関節も硬く半跏趺坐しかできません。集中することの難しさを体感しました。色々な考えが脳裏をよぎってしまい集中するどころか、早く終わってほしいと思っていました。一秒が一分くらいの長さに感じられるぐらい、私にとっては長く辛いものとなり

ました。

日々のストレスで汚れた心の洗濯をするのが目的だったのですが、洗濯機でいうところの洗いの途中ぐらいです。志半ばなので、また機会があれば坐禅会に参加したいと思っています。また普段の生活の中でも、今回教わったことを取り入れて生活していきたいです。

合掌

白石 昇平

平成二十七年十二月五日 成願寺一泊坐禅会に参加した。午後五時集合。講師は八王子金龍山少林寺の大石隆元師である。集合時、初めて参禅する方のため、坐禅の基本的な心構え、作法、坐禅の組み方を教わる。金曜参禅会にて幾度か坐禅をさせて頂いた私も、改めてお話を伺いする。この際、最も大切な事として『他人に迷惑をかけない事』をご教示頂く。六時、僧堂にて開講式。後坐禅。

教えられた作法に従い、坐禅を組む。音一つない僧堂の中、十二月の初旬、じわじわと身体が芯まで冷えてくる。幾ばくかの時間が経過した頃、不意の一喝。「寝るな!」。広い僧堂いっぱい響く声は、参禅者の誰かに向けられたもの。その張り詰めた気

迫は意外にも凜として爽快。より一層坐禅に身が入る。坐禅後、八時より法話。ここで先の『他人に迷惑をかけない事』の答えを知る。内容は以下の通り。
・心という見えないものを調えるには、身体という見えているものを調えねばならない。
・坐禅は動作と思考を絶つものであり、狎なれる事が最もよろしくない。

・一日一日を新鮮に受け入れる。なぜなら毎日毎日が尊いものであるから。

・坐禅の際、集中できていない人は必然的に身体が動く。するとその左右に坐る人もなぜか身体が動く。心が伝わってゆくからである。

・幸せとは状態である。坐禅より、それが今どこにあるのかを客観的に見つめる。

就寝。翌五時に集合。五時二十分、暁天坐禅。六時より作務。庭の掃除をさせて頂く。作務の後、朝食。粥、ごま塩・昆布・沢庵。応量器にてよそい、作法に則って頂く。八時解散。身心を浄められる、尊い時間を送らせて頂いた。

合掌

上原 まゆみ

成願寺へ足を運ぶことも初めてだったので、

仕事の関係でお寺の前を通りかかることが多く数年前より「一泊坐禅会」に興味がありました。そして、今回初めて一泊坐禅会に参加させていただきました。

坐禅をすること、お寺に宿泊させていただくことも初めての経験でワクワクと浮ついた気持ちでしたのですが、坐禅のお作法など初心者向けの説明を受けているうちにピリリと緊張感が走りました。

体験してみても印象は、坐禅は私の趣味でもある登山に少し似ているかなと思いました。

普段の生活にはない貴重な経験をさせていただきありがとうございました。お土産としていただいたお箸と匙を大切に使用させていただきます。 合掌

「新・日本の歴史」シリーズ全五巻について

地人館代表 大角 修

小峰書店から小学高学年から高校生くらいを読者対象に「新・日本の歴史」シリーズを執筆し、刊行されました。その全五巻を成願寺様に四十五セットお買い上げいただき、中野区教育長・田辺裕子さんを通して区立小学校・中学校、区立図書館に贈呈い

ただきました。田辺教育長さんから「これからの中野を創り、支えていく児童生徒の大きな財産になる」との御言葉をいただいています。

このシリーズは「仏教から見た日本史」というテーマで学校図書館向けの歴史の本を作ってほしいという依頼を受け、宗教学者の山折哲雄先生に監修をお願いして執筆しました。というのは、教科書に載っていたり、修学旅行で見えるお寺や仏像がなぜ造られたのか、学校の先生方が説明できなくて困っているというのです。そこで神社も含めて「神仏から見た日本の歴史」という内容になったのですが、お寺や神社が本やテレビでよく取り上げられるようになった今でも、「神仏から見た」というシリーズ名では販売が難しいという営業サイドの意見で、「新・日本の歴史」となった次第です。「神仏から見た日本史」という本が学校の図書館や公立図書館の児童書コーナーに入るには時期尚早というわけです。そんな情況下で中野区の小学校・中学校、区立図書館に五巻そろって多数配置されたことは感激で、感謝に堪えません。

ところで、「神仏から見た日本史」では販売が難しいという営業サイドの意見は残念ながら当然です。

それは太平洋戦争の戦後、宗教排撃の時代が長く続いたことが大きく影響しています。一九七〇年頃まで、仏教は遅れた古くさいもので、やがて社会から消えていくものだと言われたものです。

事実はそうではなく、今になって急に「伝統文化が大事だ」「子どもたちにも教育しなければ」と言われ始めましたが、戦前には普通に日常生活で語られていた仏教語の多くがすでに死語になってしまいました。「情けは人のためならず」と言えば、「むやみに同情するのはよくない」と受け取られ、「巡り巡って自分のためになる」という因果応報の意味は失われました。「袖すりあうも他生の縁」は「他生」が分からないので「多少の縁だ」ということになっていくようです。

学校の先生たちも、奈良の大仏の由来さえ説明する言葉をもちません。歴史の教科書そのものが、いまだに神仏をまともに評価できていません。教科書の歴史は、時代と社会の動きを政治・経済の面から説明したあと、仏教の動きは「〇〇時代の文化」として仏像や寺院建築、各宗開祖の著述などを取り上げています。神道のほうは、お寺と違って文化財が少ないので、ほとんど無視されています。

しかし、歴史における寺社は政治・経済の主要な担い手でもありません。時代の動きは寺社を抜きに語れないにもかかわらず、社会の動きとは切り離して「文化」という項目に押し込められています。その「文化」のセクションで、鎌倉新仏教の開祖の名や主な著述が紹介されていますが、それもまた、現代の日本人の道徳・倫理、人生観・死生観から切り離されて羅列されているので、子どもたちには理解も納得もできず、試験のために丸暗記する苦痛ばかり押しつける事態に陥っています。

このような歴史教育の不備がある中で、日本の歴史や日本人の心の来歴をもう少し分かりやすくしたいという思いから、このシリーズを執筆しました。成願寺様の御寄贈のおかげで中野区立図書館には分館も含めて各館に蔵書されていますので、手に取っていただければ幸いです。

合景筆

- 第1巻 国の成り立ちと仏教伝来（縄文時代～奈良時代）
- 第2巻 貴族と平安仏教（平安時代）
- 第3巻 武士と新仏教の誕生（鎌倉時代）
- 第4巻 大名と民衆の一揆（室町・安土桃山時代）
- 第5巻 江戸時代と日本人の心（江戸・明治時代以降）

山内短信

◎春彼岸中日法要「修証義奉読会」のお知らせ

三月二十日(日) 春分の日 午前十一時～ 受付
正午 講談 日向ひまわり師「中野長者物語」
午後一時 檀信徒総回向

◎春の観音詣りのお知らせ

【日程】四月二十九日(金・昭和の日)

成願寺七時集合・ご祈禱後出発―明治神宮(特別
拝観・お神楽鑑賞)―目黒不動瀧泉寺(ご祈禱・
山主老師お話)―能登加賀屋旅館有明店にて昼食
―赤坂豊川稲荷別院(ご祈禱・院代老師お話)―
とげぬき地藏商店街散策―成願寺夕五時帰着予定
【会費】一万三千元

◎観音奉賛会：年末の会・年初めの会の報告

昨年末の会・納めの観音様のご縁日は、観音堂にて一年の無事を感謝するご祈禱のあと、書院にて恒例の懇親会を行いました。例年講師の先生をお招きしてお説教をいただきますが、今回は住職が成願寺に伝わる文書・絵図等を披露し解説しました。

また年初めの会・初の観音様のご縁日は、前日の雪が残り足下が不便でしたが、予定通り厳修されま

した。一年の家内安全や身体健全などが祈願されると、願文の書かれたお札が配られました。書院ではお寺で鏡開きされた餅の入ったお汁粉が振る舞われ、和やかなひとときを過ごしました。

毎月ご縁日の十八日は観音堂にてご祈禱が行なわれます。申込不要です。どなたでもお詣りください。



上=理趣分経の功徳を授ける住職
下=書院にて懇親会(ともに年末の会)



雪の残るなか初観音のご祈禱

◎「安達原玄祈り写仏の会」・成願寺教室

仏画や描かれた仏様のお姿を、下図を基にして、筆と絵の具で写し描きます。初心の方も個別に指導いたします。入門随時受付。

日時 毎月第三土曜日 十二時三十分～十七時
講師 安達原千雪(安達原玄先生直門)
会費 一回 三千五百円(別途教材費が必要となります。詳細は寺務所までお尋ねください)